

# キッズアスリート・プロジェクトから見える 陸上競技普及活動について

横山 学\*

## The spread of track and field through Kids' Athlete Project

Manabu YOKOYAMA

### Abstract

The purpose of this paper is to examine the effect of events in the Kids' Athlete Project on the participants. Knowing the effect of the events would help us popularize the attractiveness of track and field among children and their parents more effectively.

The result of the questionnaire survey shows that 21 percent of participants in the Kids' Athlete Project were interested in track and field and wanted to begin it, while about 30 percent of them were thinking if they would begin it or not. It is suggested that some improvement of lecture and program is needed to continue the project.

*Keywords:* children, attractiveness of track and field, popularization

### 1. はじめに

最近、子どもたちの体力低下が話題になっている。文部科学省が毎年実施している調査によると、子どもたちの体力低下は1985年頃より始まり、2000年以降も下げ止まったまま推移している。<sup>1)</sup> また、ケガをする子どもたちが以前より増えているように感じると学校現場から声が聞こえてくる。実際、学校におけるケガの件数は1978年に34.5万件であったが、1999年には45万件に増加しており、現在も緩やかながら増加傾向にある。<sup>2)</sup>

子どもたちの体力の低下は健康に悪影響、気力の低下などにつながると懸念されているが、肥満傾向の子どもたちの増加、成人病の低年齢化は社会問題として大変危惧されている。骨折を例に挙げると、栄養が不足していることで骨が弱い、自身の筋力以上に過体重である、転びそうになった際にも上手く転倒できないなど様々な要因が考えられるが、これらは運動不足に

よる巧緻性や体力の欠如に起因している。ヒトの一生において最も心身が発達するこの時期において様々な運動経験を持つことが、今後の健康的かつ楽しい人生を送る上でとても重要となる。

平成12年に文部省（現文部科学省）は、スポーツ振興基本計画の中で、我が国の国際競技力の総合的な向上方策を策定し、オリンピックをはじめとする国際大会で活躍できる競技者の育成・強化を積極的に推進する目標を掲げた。そして、国際競技力向上方策の一つとして競技者育成プログラムの作成とともにそのプログラムを実践できる体制づくりの推進を挙げている。

日本陸上競技連盟（以後、日本陸連）は、オリンピックなどの国際大会で国民の期待に応える活躍をするために競技者の発掘、育成、強化に関する競技者育成プログラムを作成し、実践していくこととなった。なかでも、日本陸連普及育成委員会 U-12 普及部は「1人でも多くの子供に陸上競技の魅力を伝え、中学、高校へと進学しても、陸上競技を続ける子供を増やすこと」を活動目標とし、強化につながる普及活動の具体策として、「JAAF アスリート発掘育成プロジェクト

\* 香川高等専門学校詫間キャンパス 一般教育科

U-12 クリニックの開催」「一流アスリートと指導者によるキッズアスリート・プロジェクト」「小学生陸上競技指導者教本の作成」「全国小学生陸上競技交流大会の充実」を重要視し、現在に至っている。<sup>3)</sup>

また、文部科学省は平成15年より子どもの体力推進事業の一環として『子どもの体力向上ホームページ』を設置している。子どもの体力の現状や正しい生活習慣について解説しているが、いろいろな外遊びやスポーツなども紹介しており、それらを通じて子供たちの体力・運動能力の向上について学校だけでなく、家庭において考える機会を提供している。<sup>4)</sup>

陸上競技は『走る』『跳ぶ』『投げる』といった動作を極限までに追求するスポーツであるが、あらゆるスポーツにおける基本的な動作でもあり、陸上競技の能力を高めることは将来的に他のスポーツへ移行した際にも有益である。また、巧緻性の向上、体力の強化も大いに期待することができる。キッズアスリート・プロジェクトは、日本陸連のトップアスリート育成のための底辺層拡大と子どもたちの体力向上およびケガの発生確率を下げることで健康的かつ楽しい人生を過ごすという文部科学省の狙いに合致している。

本稿では日本陸連が主催するキッズアスリート・プロジェクトの概況を報告し、参加小学生に対するアンケート調査の結果から実施効果の有無および今後の改善点を論じる。

## 2. キッズアスリートプロジェクト —夢の陸上キャラバン隊—

### 2.1 キッズアスリートプロジェクト開催の経緯

競技力を向上させるためには、より良い環境と組織による強化システムは必要不可欠である。強化体制作りには競技者の意見も反映させる必要があるが、強化委員会と選手会双方の間での議論はこれまでほとんどなく、選手会の存在自体も忘れられている状況であった。また、競技者は後世につながる子供たちの憧れでなければならないが、これまで選手会の活動は活発ではなく、上述の役割を果たしていなかった。「競技者が未来のアスリートを発掘し、陸上競技ファンの増加に対する活動に積極的に関わってほしい」という気運が高まり、競技者側からの発案によって、各競技のトップアスリート数名が小学校に行き、デモンストレーション(実演ショー)、児童との対決、レッスンなどのふれあいの中でスポーツの基本である「走る」「跳ぶ」「投げる」楽しさを感じ、陸上競技の魅力を伝える『キッズアスリート・プロジェクト 夢の陸上キャラバン隊』

を発足することとなった。<sup>5)</sup> 2006年11月に東京都杉並区で第1回を開催して以降、今大会は38回目、香川県では2度目の開催となっている。

### 2.2 開催準備

当イベント会場は香川県三豊市立麻小学校グラウンドであった。参加予定の各小学校体育主任および香川県陸上競技協会所属の審判員を中心に開会式前日から1組の棒高跳びピット、50mH 走路およびリレーコースの準備がなされた。『できるかぎり子供達には本物を見せる』という日本陸連の方針によりイベントに必要なとするすべての施設は丸亀競技場で試合時に用いているものを利用した。棒高跳びについては本来であれば機械で支柱の高さをコントロールするが、今回は手動式の簡易なものとした。また助走路用ゴム(スーパーX)は全く舗装のされていない地面上に敷いたため、地面からの十分な反発を得ることができず、通常より助走スピードおよび踏切時の力が減少することとなった(写真1)。



写真1 棒高跳びピット

### 2.3 プログラム構成

プログラムはデモンストレーション、レッスン&チャレンジ、リレーチャレンジクリニックの3部から構成されている。2011年度はこの3部構成において他の会場でも同様に実施されている。対象は小学1年から6年生までとなっているが、レッスン&チャレンジおよびリレーチャレンジクリニックに参加するのは5年生~6年生のみであった。1~4年生はデモンストレーションの見学後、各学校に戻ることもあった。

### 2.4 開会式

12月6日(火)午前10時20分より開会式の開催(写真2)。繁田進氏(日本陸上競技連盟普及育成委員会委員長)、高橋卓巳氏(香川陸上競技協会副理事長)およ

び岡田満徳氏（三豊市立麻小学校校長）の挨拶。高平選手（200m）、塚原選手（100m）、畑瀬選手（砲丸投）、河北選手（400mH）、荻田選手（棒高跳）、中野選手（棒高跳）、綾選手（ハンマー投）の挨拶を終え、全員で体操した後にデモンストレーションへ移行した(写真3)。



写真2 開会式



写真3 キャラバン隊の選手

## 2.5 トップ選手によるデモンストレーション

初めに、塚原選手と高平選手によるバトンパスのデモンストレーションが行なわれた。その際には 2008 年北京オリンピックの4×100mR 決勝において銅メダルを獲得したバトンを用い、1 本目は通常のオーバーハンドパスを行なった。2 本目はアンダーハンドパスを実演し、世界レベルのバトンパスを間近で見る貴重な機会を得ることができた(写真4)。

ハードル走では、河北選手が実際に跳ぶ高さのハードルを目の当たりにした子供たちは大変驚いていた。50mの中で数回跳び越えて見せた後に参加者と 50m H競争を行なった。選手と楽しそうに、そして真剣に走っている姿が印象に残った。

投擲種目では、麻小学校の体育主任である本田恵先生が試合で用いる 7.26 k g の砲丸を投げると、子供た



写真4 塚原選手と高平選手によるバトンパスの様子

ちから大きな歓声が上がった。その後に畑瀬選手が同じ砲丸を約 16m 投げると、あまりにも遠くに投げたこと、「ドスッ」と鈍く大きな音が地面を通じて振動として伝わったことで、子供たちは目を丸くさせていた。その後、小さいラグビーボールに羽が付いた形状をしたヴォーテックスフットボールの飛距離を競うチャレンジを行なった。運動場の端に届くほどの畑瀬選手による特大スローに当イベント最大の歓声がグラウンドに響いていた(写真5)。



写真5 畑瀬選手によるヴォーテックスフットボール投げの様子

最後の棒高跳びでは、荻田選手による跳躍を 2 回見ることができた。跳躍開始前に、助走時における手拍子の仕方によって選手が観客の力をもらって気持ちよく跳躍できることを説明し、手を叩くスピード、リズムなどをレクチャーした後、4m70 および 5m の高さをクリアした(写真6)。目前で見上げるほどの高さにあるバーを軽々と跳び越えて見せた荻田選手に助走時以上の拍手が送られた。



写真6 荻田選手による跳躍の様子

## 2.6 トップ選手によるレッスン&チャレンジ

児童たちを約120人の4グループに分けた上で、各グループが短距離（リレー）、ハードル、投擲、跳躍のいずれかに挑戦した。

短距離ブロックでは最新のシューズとスパイクを間近で見、直接に触れた後、スタートダッシュの簡単なレッスンを受けた。また、児童数名が代表して選手と一緒にバトンパスを行なった。

ハードルブロックでは一般男子110mHの高さ106.7cmにセットしたハードルを教台用意し、ハードルをくぐったりインターバルを何歩で走ることができかに挑戦した。

投擲ブロックでは競技用の投擲物（砲丸、円盤、ハンマー、やり）に直接触れる機会を持った。サークル内では円盤投げならぬ回転ドッジボール投げを行なった。そして、ヴォータックスフットボール投げの講習会を行なった後に握力測定を挑戦した。

跳躍では約40人のグループを3組作り、3つの内容（①マットに乗って飛び跳ねる、側転を行なうなどマットの感触を確かめる。②ポールを手にとってポール



写真7 荻田選手と一緒にポール走を行なう子供たち

走を行なうことで、ポールの重さを体感する。③ポートボール時に用いる台上からポールにぶら下がって、できるだけ遠くに着地する。）を順番に挑戦した（写真7）。ポールが重いこと、「端を持って走ることがいかに難しいか」「40cmの高さからぶら下がって着地することが考えていた以上にいかに勇気を必要とするか」を実感していた。

すべてのチャレンジにおいてトップ選手たちは児童たちに積極的に声をかけ、アドバイスを送っていた。『トップ選手としての立場から陸上界に貢献しよう』、そして『陸上競技の面白さを伝えよう』という気持ちが彼らの言動から大変伝わった。

## 2.7 リレーチャレンジ

8つの小学校を4チームの2組に分け、上位2チームが決勝でアスリートチームと対戦できるという対校戦の形式で実施した。決勝はアスリートチームが2位という結果に終わったが、選手は子供の頃に戻ったように楽しく走っていた（写真8）。



写真8 リレーチャレンジの様子

## 3.アンケート調査

### 3.1 評価方法

本イベントに参加した三豊市内の8小学校における1～6年生まで（一部の小学校では4～6年生のみ）の男女計748人を対象に各参加小学校体育主任を通じてアンケート調査を実施した。質問は11項目あり、質問7から質問9まではレッスンに参加した5～6年生のみの回答となった。

そして、本イベントの実施目的である「陸上競技の面白さを伝えるとともに、トップを支えるための底辺層の拡大」に対して効果の有無を評価するために以下のような基準を設けた。

質問5の内容は【イベント参加以前から中学生にな

った際に陸上競技をしたいと考えていたか】、質問10の内容は【イベント参加後に陸上競技をしたいと思ったか】である。質問5において【はい】と答えた上で質問10において【中学生から】と回答した場合、質問5で【いいえ】と答えた上で質問10において【いいえ】と再び回答した場合は、ともにイベント実施前後において気持ちの変化がないことから、これらを基準にポジティブあるいはネガティブに変化したと評価することにした。その評価結果が表1である。

		質問10			
		1 すぐやりたい	2 中学生から	3 いいえ	4 わからない
質問5	はい	〇〇	△	××	×
	いいえ	◎◎	◎	▲	○

○群・・・実施後ポジティブに変化  
△群・・・実施後の変化なし  
×群・・・実施後ネガティブに変化

表1 イベント効果の評価基準

### 3.2 調査結果

質問1は参加小学生の学年、性別を調べたものである(図1)。学年ごとの参加率は1~3年生が各7%、4年生が18%、5年生が30%、6年生が31%であった。また性別ごとでは男366人(49%)、女382人(51%)であった。

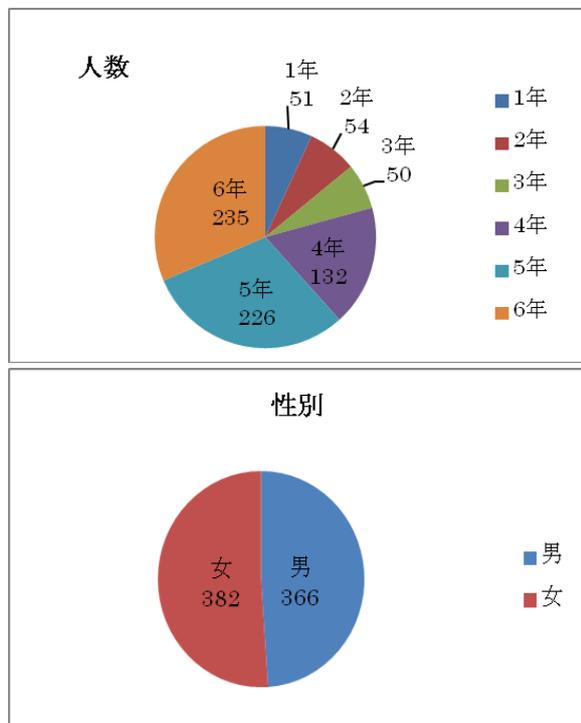


図1 質問1の結果

質問2は【トップ選手によるデモンストレーション

を観る以前に、陸上競技のことを知っていたか】と尋ねたところ、全体の96%にあたる717人の子供たちが知っており、陸上競技というスポーツが非常によく知られていることが分かった(図2)。

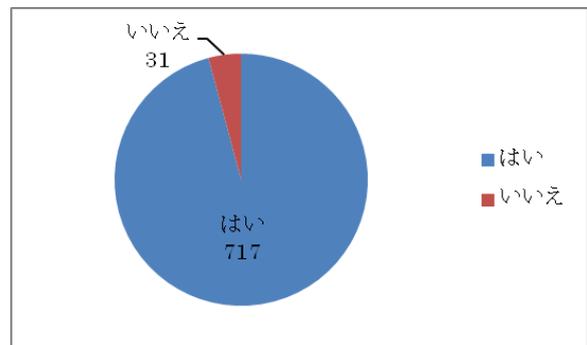


図2 質問2の結果

質問3は【質問2でははい】と答えた小学生に対して知っていた種目は何ですか?】と尋ねたところ、最も認知されていた種目のトップ5はハードル走523人(73%)、棒高跳459人(64%)、走幅跳318人(44%)、ハンマー投318人(44%)、走高跳272人(38%)であった(図3)。

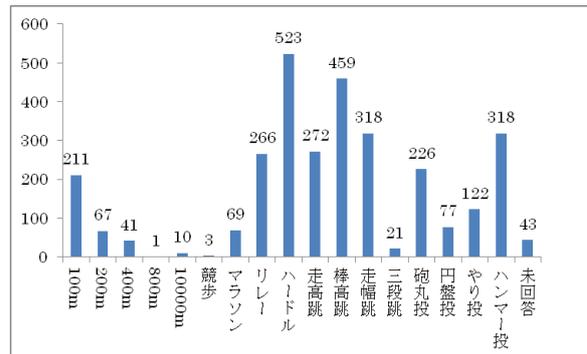


図3 質問3の結果

質問4は【トップ選手によるデモンストレーションを観る以前に、陸上競技のことをテレビやスタジアムなどで見たことがありましたか?】と尋ねたところ、全体の81%にあたる608人の子供たちが名前だけでは

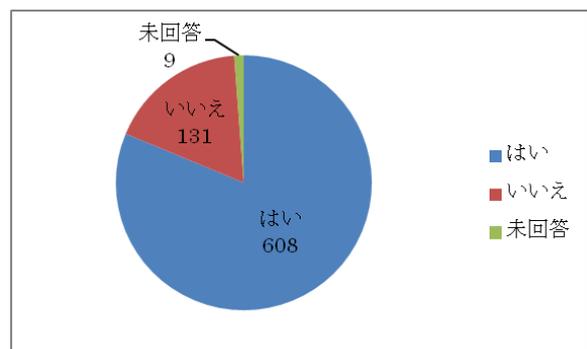


図4 質問4の結果

なく、映像あるいはライブを観ていることが分かった(図4)。また、今回初めて陸上競技を目にした子供たちは未回答の9人を除く131人(18%)であり、5人に1人は観ることがないという現状もよくわかった。

質問5は【トップ選手によるデモンストレーションを観る前、中学生になったら陸上競技をしたいと考えていましたか?】と尋ねたところ、252人(34%)の子供たちが中学生になったら陸上競技をしたいと考えていることが分かった。これは全体の約1/3に相当する数字である(図5)。

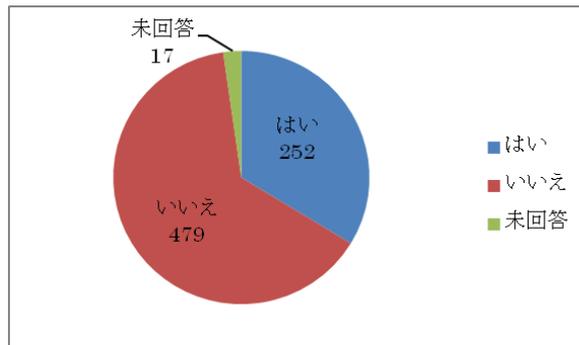


図5 質問5の結果

質問6は【トップ選手によるデモンストレーションを観てどう思いましたか?】と尋ねたところ、「1.かっこいい」は506人(68%)、「2.すごい」は626人(84%)、「3.自分も選手みたいになりたい」は206人(28%)、「4.やってみたい」は274人(37%)、「5.自分には無理」は128人(17%)、「6.その他」は34人(5%)という回答であった(図6)。「6.その他」の中には、「応援したい」「あこがれる」「やりたくない」「何も思わなかった」「どうしたらなれるのだろう」といった声があった。

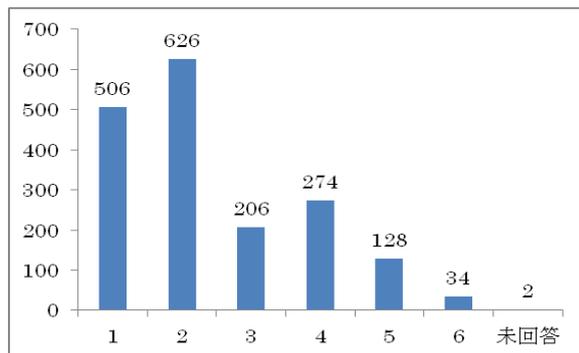


図6 質問6の結果

質問7は【トップアスリートによるレッスン&チャレンジについて、あなたはどの種目に参加しましたか?】と尋ねたところ、「1.短距離」は117人(26%)、「2.ハードル」は110人(24%)、「3.棒高跳」は110人(24%)、「4.ヴォータックスフットボール投げ」は118

人(26%)、「5.リレー」は21人(5%)という回答であった(図7)。

リレーの参加者の中には他の4種目のいずれかに参加している子どももいたが、基本的には各種目に均等な割振りがなされていた。

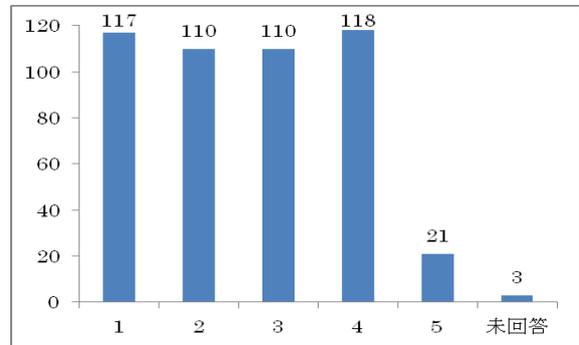


図7 質問7の結果

質問8は【トップアスリートのレッスンを受けてみてどうでしたか?】と尋ねたところ、「1.わかりやすい」は314人(69%)、「2.ていねい(しんせつ)に教えてくれた」は306人(67%)、「3.楽しかった」は397人(87%)、「4.よくわからなかった」は6人(1%)、「5.教え方がいいかげん」は0人、「6.つまらなかった」は1人、「7.その他」は28人(6%)という回答であった(図8)。これらのことから、トップアスリートのレッスンに対する子どもたちの満足度はかなり高いことが分かった。

また「7.その他」では「体験をしたのがよかった」「いっしょに走ったので、速さがよくわかった」「やりやすかった」「教えてくれている」「声がよく聞こえなかった」「時間が短かった」などの今後の改善につながる意見を聞くこともできた。

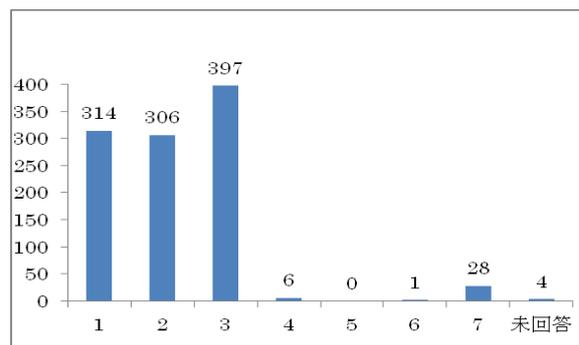


図8 質問8の結果

質問9では【種目にチャレンジしてみてどうでしたか?】と尋ねたところ、「1.楽しかった」は全体の89%にあたる406人が回答した。この結果から最初の狙いは達成したと言えるだろう。「2.かんたんだった」は44人(10%)、「3.うまくできた」は136人(30%)、「4.

自信になった」は90人(20%)、「5.つまらなかった」は3人、「9.その他」は10人(2%)という回答であった(図9)。

一方で、31%にあたる140人が「6.難しかった」、40人(9%)が「7.思うようにできなかった」、11人(2%)が「8.自分はダメだと思った」という回答だった。とりわけ、「6.難しかった」という回答が31%に達していることから内容の改善を検討する必要があるのではないだろうか。

しかしながら、「難しい」と感じた時に「もうやりたくない」とネガティブに動機が低くなる子どもがいれば、「もっとやってみよう」とポジティブに動機が高まる子どももいる。そこで、参加後の感想である「すぐやりたい」「中学生から」をポジティブ群、「いいえ」「わからない」をネガティブ群と定義することで、「難しい」と感じた時に子どもたちの動機がどちらに変化するのか、そしてチャレンジした種目において差が生じるのかを分析をした。

表2は「6.難しかった」と回答した子どもたちが参加した種目と参加後の感想を性別ごとに集計したものである。ポジティブ群の男子は男子総数の43%にあたる23人、女子は40%にあたる34人であったことから、全体の6割程度は「難しい」ことを行なうと、「もうし

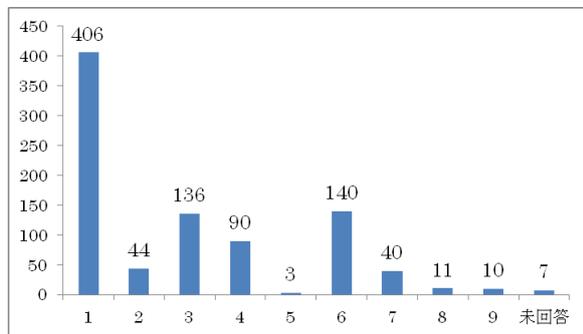


図9 質問9の結果

	難しい	参加後の感想				計
		すぐやりたい	中学生	いいえ	わからない	
短距離	25	0	0	1	6	7
		8	2	2	6	18
ハードル	28	2	2	2	5	11
		2	2	4	9	17
棒高跳	38	6	5	1	6	18
		8	2	4	6	20
ヴォーテックス フットボール投	47	5	3	4	5	17
		5	5	5	15	30
リレー	2	0	0	0	1	1
		0	0	0	1	1
計	140	54	13	10	8	23
		86	23	11	15	37

各項目下段(赤字):女子

表2 難しかった種目と感想における性別ごとの内訳

たくない」「うーん、どうしようか」といったネガティブな反応を示すことが今回の調査でわかった。

そして、難しさを感じた際の種目ごとにおけるネガティブ反応が最も大きいのはハードルの20人(71%)であり、以後はヴォーテックス投げの29人(62%)、短距離の15人(60%)、棒高跳の17人(45%)であった。

さらに性別ごとで分析をすると、男子におけるネガティブ反応が最も大きい種目は短距離の7人(100%)、以後はハードルの7人(64%)、ヴォーテックス投げの9人(53%)、棒高跳の7人(39%)であった。女子においてはハードルの13人(76%)、以後はヴォーテックス投げの20人(67%)、棒高跳の10人(50%)、短距離の8人(44%)であった。男女のハードルと女子のヴォーテックス投げにおいては3人に2人、男子の短距離においては全員がネガティブ反応を示していることから短距離、ハードル、投擲種目のレッスン内容を検討すること、場合によっては性別で行なう内容を変える必要があることを示唆している。

質問10では【キッズアスリート2011に参加した後、陸上競技をやってみようと思いましたが?】と尋ねたところ、全体の32%にあたる233人が「すぐやりたい」、21%にあたる156人が「中学生になってからしたい」と回答した。参加者の半分強にあたる子どもたちは陸上競技をしたいことが分かった。「いいえ」は117人(16%)、「わからない」は225人(31%)という回答であった(図10)。

これらの結果から、イベントに参加したことで全体の19%にあたる137人の子どもたちが新たに陸上競技をしたいと考えていることが分かった。

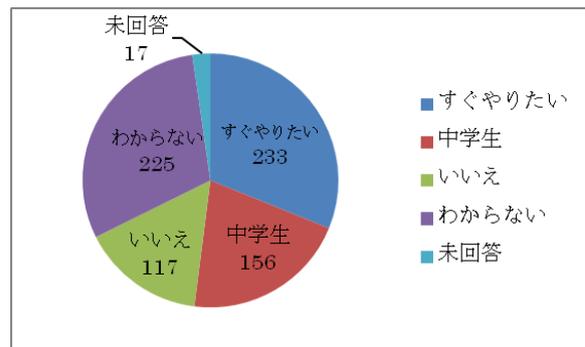


図10 質問10の結果

質問11では【質問10で「いいえ」および「わからない」と答えた小学生(参加者の47%)に対して、その理由は?】と尋ねたところ、「1.自分には向いていない」が121人(36%)、「2.楽しくない」が17人(5%)、「3.しんどい」が63人(19%)、「4.こわい」が48人(14%)、

「5.他にしたいスポーツ(こと)がある」が 139 人 (41%)、「6.難しい」が 108 人 (32%)、「7.その他」が 16 人 (5%) という回答であった (図 1 1)。

「5.他にしたいスポーツ (こと) がある」と回答した 139 人にしたいことを書いてもらったところ、トップ 5 は野球 (18 人)、バスケットボール (16 人)、サッカー (14 人)、卓球 (11 人)、テニス (11 人)、バドミントン (11 人) であった。

また、「7.その他」では「少し経ってからやってみよう」というポジティブな意見、「まだ決まっていない」「いまはわからない」といった説得によっては「中学生になってからしたい」に変わりうる意見、そして「興味がない」といったネガティブな意見があった。

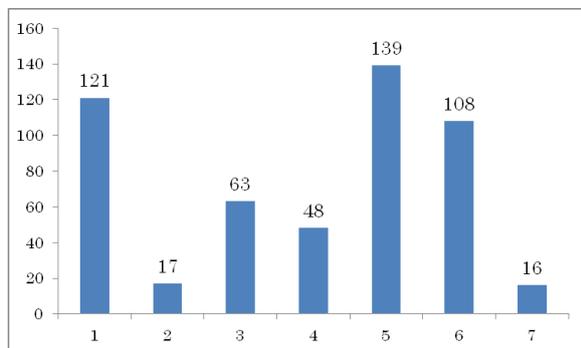


図 1 1 質問 11 の結果

質問 5 と質問 10 の結果から「イベントに参加したことで 137 人の子どもたちが陸上競技をしたい」ということが分かったことはすでに上述しているが、一例を挙げれば「イベントに参加したことで陸上競技をしたくない」あるいは「初めはしたくなかったが、今はわからない」などと思った子どもたちがいるはずである。しかし、この結果からは集団における数の増減は分かっても、集団の間で誰がどのような移動をしたのかを正確に知ることはできない。

そこで、表 1 においてすでに定義した評価基準を序列化したものが表 3 である。【△】群はイベント参加前後において変化のないグループである。良い意味で変化がない【△】を基準とし、【△】から【◎◎】に向かってポジティブかつ大きく、【××】に向かってネガティブかつ大きく変化したことを示している。そして、この序列表に基づいて集計したものが図 1 2 である。

イベント実施の前後において陸上競技に対するイメージが最もポジティブに変化したと考えられる【◎◎】は 86 人 (12%) であった。【◎◎】ほどではないものの、ポジティブな変化が大いに見られた【◎】は 75 人 (10%) であった。当初より陸上競技を行なう予定であったが、イベントを通じてすぐにでもやりたいと

◎◎	質問 5 で【いいえ】、質問 10 で【すぐやりたい】と回答したケース
◎	質問 5 で【いいえ】、質問 10 で【中学生】と回答したケース
○○	質問 5 で【はい】、質問 10 で【すぐやりたい】と回答したケース
○	質問 5 で【いいえ】、質問 10 で【わからない】と回答したケース
△	質問 5 で【はい】、質問 10 で【中学生】と回答したケース
▲	質問 5 で【いいえ】、質問 10 で【いいえ】と回答したケース
×	質問 5 で【はい】、質問 10 で【わからない】と回答したケース
××	質問 5 で【はい】、質問 10 で【いいえ】と回答したケース

表 3 評価基準の序列表

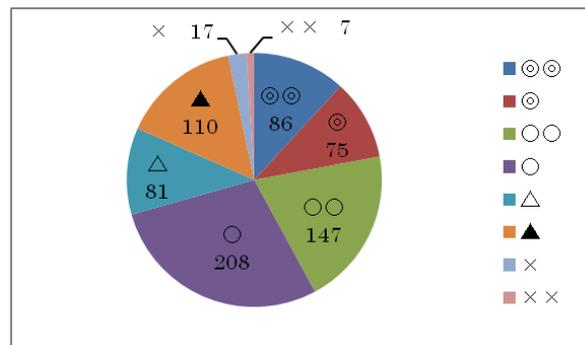


図 1 2 イベント効果の評価結果

答えた【○○】は 147 人 (20%) であった。また、中学で行う予定はなかったが、いまは迷っていると答えた【○】もポジティブな変化があったと言えるだろう。

【○】と評価された子供たちは 208 人 (28%) であった。そして、実施の前後も変わらず中学から陸上競技をしたいと答えた【△】は 81 人 (11%) であった。対照的に最もネガティブに変化したと考えられる【××】は 7 人 (1%) であり、中学で行う予定だったにもかかわらずいまは迷っていると答えた【×】は 17 人 (2%) であった。また、実施の前後も変わらず陸上競技をしたくないと答えた【▲】は 110 人 (15%) であった。

この結果から、参加総数の 22%にあたる 161 人の子供たちの関心を新たに獲得することができたが、7 人 (1%) の子供たちは関心を失った。また、208 人 (28%) の子供たちがポジティブに、17 人 (2%) の子供たちがネガティブに迷っていることも分かった。

#### 4.結論および今後の改善点

アンケート調査を実施したことで分かったことを整理すると以下の通りである。

①同イベント参加総数の 96%にあたる 717 人の子どもたちは陸上競技を知っており、参加総数の 81%にあ

たる608人がテレビ映像あるいはライブ観戦の経験がすでにある。

- ②イベント前において、全体の34% (252人)が中学校で陸上競技をしたいと考えていた。
- ③イベント後においては全体の53% (389人)まで上昇した。
- ④イベント実施効果の内訳は、全体の22% (161人)が「新たに陸上競技をしたい」、1% (7人)が「新たに陸上競技をしたくない」、28% (208人)が「ポジティブに迷っている」、2% (17人)が「ネガティブに迷っている」であった。
- ⑤楽しさを伝えることには成功しているが、チャレンジ参加者の31% (140人)が「難しい」と感じており、そのうちの約60% (83人)は動機が下がる傾向にある。

リレーまでの30分の時間がトップアスリートによるレッスン&チャレンジのために本来は割かれていたが、デモンストレーションが押したこともあり、実質20分程度の中で行なわざるを得なかった。各種目において約120人を担当するにあたっては子どもたちを機械的に流れ作業でどンドンさせることとなり、結果として時間内に行なうことができなかった。小学生を対象としていることからより丁寧に説明する必要があり、この点を疎かにすると、【陸上嫌い】の子どもたちを増やす危険性がある。それにもかかわらず、このような形となったことに『これで陸上競技の普及につながるのだろうか』とスタッフとして参加した筆者は疑問に感じたが、アンケート結果から大きい影響は見られなかった。

本イベント実施の狙いは陸上競技の魅力を伝え、陸上愛好者を増やすことであるが、陸上競技に関心を持っている子供たちの心を離さないことはもちろん、関心を持たない子供たちの心に陸上の魅力をいかに伝え、「やってみよう」と思わせることがたいへん重要である。そのためにできる努力はなんでも行なわなければならない。208人の子供たちがポジティブに迷っているが、この数字は全体の約3割に達しており、決して見過ごすことができない数字である。彼らは『潜在的な陸上部員予備軍』であり、レクチャーの内容、時間配分、または小学生の体格・運動能力を考慮した種目選択などを綿密に考えて取り組むことで「新たに陸上競技をしたい」と考える子供たちの増加が大いに期待できる。まずは『時間が短い』といった参加者からの声があったことからレクチャーは30分ではなく、1時間は確保することで丁寧な指導とじっくり取り組む余裕を子

どもたちに与えることを提言する。

## 謝辞

アンケート調査に際して、本イベントに参加した各三豊市立小学校担任教員の多大なるご協力に感謝申し上げます。また、本紀要の執筆にあたり、本校教員の小野安季良准教授に感謝申し上げます。

## 参考文献

- (1)『平成19年度体力・運動能力調査』 文部科学省
- (2)『学校の管理下の災害—基本統計—』 日本体育・学校健康センター
- (3)『競技者育成プログラム』 財団法人日本陸上競技連盟
- (4)子どもの体力向上ホームページ 文部科学省  
<http://www.recreation.or.jp/kodomo/index.html>
- (5)『キッズアスリート・プロジェクト —夢の陸上キャラバン隊—』 財団法人日本陸上競技連盟 HP  
<http://www.jaaf.or.jp/kids/>